

## 編 集 後 記

本号「杏林医会誌第56巻」をお届けするにあたり、平素より杏林医学会の活動にご理解とご支援を賜る会員の皆さまに、心より御礼申し上げます。

2025年は、我が国が戦後80年という大きな節目を迎える年にあたります。国際社会では、我が国政府が掲げる「開かれたインド太平洋」構想がよりグローバルな展開を見せ、医療・保健分野においても各国との連携強化、知識・人材の交流、国際的な医療課題への共同対応が求められる時代に入りました。こうした環境変化は、私たち医学・医療者教育に携わる者にとっても、視野を広く持ち、国際協力の流れを医学研究と診療の発展にどう結びつけていくかが問われる局面であると感じております。

一方、国内に目を向ければ、多摩地区の地域医療の崩壊もメディアに取り上げられ、病院収支の赤字が公に議論されるほど医療機関を取り巻く経営環境は厳しさを増しています。また、少子化の影響は大学教育にも及び、大学入学者数は今後減少局面に入ることが確実視されています。医学教育を担う大学にとって、今後は入学者確保だけでなく、社会が求める医療人材像を明確に示し、魅力ある教育・研究環境を整備し続けることが一層重要となります。

杏林大学医学部附属杉並病院は開設から1年を迎え、本号特集の座談会では、松田理事長、近藤病院長、市村病院長、高橋副院長、楊副院長をお迎えし、分院が果たすべき役割、地域からの期待、本院との連携の深化、体制整備についてご意見を伺うことができました。小児救急の24時間対応、内視鏡・眼科・脊椎脊髄外科といった専門診療の拡充、予防医学センターやスマートウォッチ外来など新しいアプローチは、地域と大学が共に発展するモデルを示すものと言えます。

また、本号特集の医学部基礎医学系教室の最前線においては、病態生理学教室の寺尾教授、薬理学教室・櫻井教授のインタビューを掲載しております。医学教育・研究の将来を考える上で、若い世代が研究の魅力に触れ、自ら問いを立てる姿勢を育む重要性を改めて痛感させられる内容でした。本誌が、杏林に関わるすべての皆さまと共に、次の時代の医療と教育の姿を考える一助となれば幸いです。

最後に、本号の刊行にご協力くださった執筆者の先生方、査読者、編集委員の皆さまに深く感謝申し上げます。今後とも、忌憚のないご意見をいただきながら、より充実した誌面づくりに努めてまいります。

(F.N.)

## 編 集 委 員

(長) 長 島 文 夫

跡 見 友 章    阿 部 展 次    今 泉 美 佳

井 本    滋    岸 野 智 則    高 崎 由佳理

戸 成 綾 子    長 瀬 美 樹    森    秀 明

渡 邊 衡一郎

杏林医学会雑誌 第56巻 第4号

URL : <http://www.kyorin-u.ac.jp/univ/user/kyorinms>

令和7年12月26日発行

編集人 長 島 文 夫

発行所 杏 林 医 学 会

東京都三鷹市新川6-20-2

杏林大学 医学図書館内